

2009年度 財団法人交流協会フェロシップ事業成果報告書

中島敦「マリヤン論」

元智大学

廖秀娟

招聘期間（2009年7月19日～8月17日）

2009年10月

財団法人 交流協会

## 中島敦「マリヤン」論

廖秀娟

元智大学応用外国語学科

### 要旨

中島敦の第二作品集『南島譚』は、昭和17年10月、「今日の問題社」によって刊行された。この作品集に収録された「環礁—ミクロネシア巡島記抄—」（以下、「環礁」）六編は、表題作「南島譚」と並んで「南洋行の直接の土産」と称され、パラオを中心としたミクロネシア滞在中における中島敦の実体験に基づいて書かれたものである。このうち、「マリヤン」は「環礁」という総題でまとめられた六編のうちの一つである。

同作は、同僚と打ち解けた交際ができずにいるパラオの役所に勤務する「私」が、唯一の話し相手である「土俗学者 H 氏」の部屋で出会ったパラオ島民の女性マリヤンについて、内地に帰った「私」がこのマリヤンを回想する、という手法で描いた物語である。

また、作中に登場する「土俗学者 H 氏」は、中島と親交のあった土方久功をモデルとしていることは、ほぼ定説となっている。そして、マリヤンのモデルとなった〈マリア〉という女性も、その名が中島敦の日記中に見られることなどから、本作品は中島のパラオでの生活の一端を映し出し、作者の実体験に近いものであると思われる。

このような事情のゆえ、「マリヤン」が一つの小説として論じられることはむしろまれで、作者・中島敦の〈南洋〉像や〈未開〉世界への関心、ないしは彼の〈南洋行〉を定義する際においてこそ、より多く取り上げられてきたのである。

以上のように、「マリヤン」の趣旨は一見すると恋愛・結婚とは関係ないかのようにも見える。だが、本論では、南洋島民マリヤンのテーブルに厨川白村の「英詩選釈」や、ピエール・ロティの「ロティの結婚」が置かれていたとする作中の記述に着目し、「私」の語りに注意を払いながら、恋愛・結婚を補助線として同作品の解釈の可能性を開いていくことを試みようとするものである。

キーワード：恋愛、南洋行、未開、厨川白村、「ロティの結婚」

## 中島敦「マリヤン」論

廖秀娟

元智大学助理教授

### 一、はじめに

中島敦は昭和16年7月から翌年3月半ばにかけての8カ月間にわたって、南洋統治領の日本語教科書編集のため、南洋庁の国語編集書記としてパラオに赴任した。帰京後、中島敦はパラオを中心とするミクロネシア滞在中の実体験や現地で収集した資料に基づいて二つの作品群を書き上げ、昭和17年11月に『南島譚』という総題で「今日の問題社」より刊行された。そして、この作品集に収録された「環礁—ミクロネシア巡島記抄—」（以下、「環礁」）六編は、表題作「南島譚」と並んで「南洋行の直接の土産」と称されたものである。このうち、「マリヤン」は「環礁」という総題の下にまとめられる六編のうちの一つである。

同作に登場するパラオの役所に勤務していた「私」は、同僚と打ち解けた交際ができずにいるが、唯一の話し相手である「土俗学者 H 氏」の部屋でパラオ島民のマリヤンと出会う。この「マリヤン」という作品は、内地に帰った「私」がこの女性マリヤンを回想する、という形をとった物語である。

また、作中に登場する「土俗学者 H 氏」が中島と親交のあった土方久功をモデルとしていることは、ほぼ定説となっている。さらに、マリヤンのモデルとなった〈マリア〉という女性も、その名が中島敦の日記中<sup>1</sup>に見られることなどから、本作品は中島のパラオでの生活の一端を映し出し、作者の実体験に近いものであると思われる。このような事情のゆえ、「マリヤン」が一つの小説として論じられることはむしろまれなことで、作者・中島敦の〈南洋〉像、〈未開〉世界への関心、ないしは彼の〈南洋行〉を定義する際に頻繁に取り上げられてきたのである。

このように、「マリヤン」の趣旨は、一見すると恋愛や結婚とは関係ないかのようにもみえる。だが、本論は、南洋島民マリヤンのテーブルに厨川白村の「英詩選釈」や、ピエール・ロティの「ロティの結婚」が置かれていたとする作中

---

<sup>1</sup> 「夕方、土方氏宅にて島民料理を喰ふ。(中略)食後、島民の唄(日本語と土語と交れるもの)を皆で唱ふ。今日の料理はマリヤのご馳走なり。」(昭和十六年十二月二十一日日記、『中島敦全集3』筑摩書房、P488、2002.2)、「夜土方氏に到り、阿刀田氏高松氏等と飲み喰い語る。十一時、外に出で一同マリヤを誘出し、月明に乘じコロール波止場に散歩す、プール際にて小憩。帰途初詣の人に会うこと多し、疲れて帰る。」(昭和十六年十二月三十一日日記、『中島敦全集3』筑摩書房、P489、2002.2)。

の記述に着目した上で、「私」の語りにより注意を払いながら、恋愛・結婚を補助線とした作品解釈の可能性について試みようとするものである。

## 二、〈矛盾〉を孕む語り

前述したように、「マリヤン」は帰京した内地人の「私」がマリヤンというミクロネシア人を回想し、彼女を語り始める形をとる作品である。この「マリヤン」の冒頭で「私」は「マリヤンというのは、私の良く知っている一人の島民女の名前である<sup>2</sup>」と説明してから、マ・リ・ヤ・ンの四つのカタカナによって構成されたつづりが初めて意味を持つようになったものである。さらに、山路龍天が『文学をいかに語るか 方法論とトポス<sup>3</sup>』の「固有名詞」の項目で、名前を次のように定義したのである。

〈名〉とは、物語世界内での〈人格<sup>ペルソナ</sup>－役割

〉の唯一の指示詞、ただ言葉よっての成り立つ架空の世界の住人のまさに〈顔〉であり、その舞台上の〈仮面<sup>ペルソナ</sup>〉なのだ。そしてこの普通は指示詞にすぎない固有名詞の表面に、いわば秘められた共示義<sup>コンテクション</sup>（含意）として時に突出する名の意味こそは、この〈顔〉あるいは〈仮面〉をずばり一挙に特徴づけ、紛うことなく識別させる、人物それぞれの〈烙印<sup>ステイグマ</sup>－傷痕

この定義からすると、決して看過できないのは、「マリヤンとはマリヤのことだ。聖母マリヤのマリヤである。パラオ地方の島民はすべて発音が鼻にかかるので、マリヤンと聞こえる」という一文である。つまり、「私」が語ろうとするのは、島民マリヤの自己認知した〈マリヤ〉ではなく、「私」の耳に聞こえる〈マリヤン〉としての彼女である。言葉を換えて説明すれば、島民マリヤは自らの名前を疑いもなく〈マリヤ〉だと思っはいるが、「私」は彼女の意志を無視し、自分の耳やまなざしを通して聞こえ、映し出された彼女のみ語ろうとするのである。

要するに、〈マリヤ〉は語り手の意思の元で名前をはく奪されたのみならず、名前の喪失によって存在自体が抑圧されるのである。そして、この語り手の意図は作品の題目「マリヤン」からも裏付けられる。従って、われわれが唯一構築し得るのは「私」の目によって析出されて描き出される島民女〈マリヤン〉像である。ところが、読み手であるわれわれは、時々「私」の言葉の食い違いに遭遇し、その読解においてつまづかざるを得ないことが少なからずある。

<sup>2</sup> 本論で用いている作品「マリヤン」の本文引用はすべて『中島敦〈ちくま日本文学全集〉』（筑摩書房、1992.7）によった。傍点は作者、傍線は発表者によるものである。

<sup>3</sup> 大浦康介編『文学をいかに語るか 方法論とトポス』新曜社、P385、1996.7。

例えば、「マリヤンというのは、私の良く知っている一人の島民女の名前である」と「私」が言っているが、実際に「私」の言説を細かく検証すると、「私」が持つマリヤンに関する情報は、土俗研究者 H 氏から得たものがほとんどである。これは作品全編に数多くつづられる、「H 氏に聞くと」(P257) や「H 氏は言っていた」(P259)、「よく聞くと」(P255)、「あとで H 氏に聞くと」(P254) という「私」の言葉から解することができる。

または、「私」の目を通して観察して得たものもある。「私がはじめてマリヤンを見たのは、」(P253)、「私はマリヤンの盛装姿を見たことがある」(P259)、「マリヤンは私に見られていることも知らずに」(P260) と、「私」がマリヤンに向ける観察のまなざしが存在している。これをさらに深く探ってみれば、「私」が直接にマリヤンと会話を交わした場面は、全編にわたって 2 カ所しかないと分かる。しかも、それはマリヤンの「本気」な気持ちをちやかすような言い方をとっているもの<sup>4</sup>であって、マリヤンの「本気」と真正面から語り合うものではないのである。そこでみえてくるのは、「私」のマリヤンとの交渉の少なさと情報の間接性である。

次に「私」のマリヤンの〈身体〉をめぐる評価の揺れの存在である。「私」はマリヤンの容姿について、次のように語っている。

マリヤンの容貌が、島民の目から見て美しいかどうか、これも私は知らない。醜いことだけはあまいる。少しも日本がかつた所もなく、また西洋がかつた所もない（南洋でちょっと顔立が整っていると思われるのは大抵どちらかの血が混っている者だ。）純然たるミクロネシヤ・カナカの典型的な顔だが、私はそれを大変立派だと思ふ。人種としての制限は仕方が無いが、その制限の中で考えれば、実にノビノビと屈託の無い豊かな顔だと思ふ。 (P251-P252)

すなわち、「私」はマリヤンの顔を「ノビノビと屈託の無い豊かな顔だ」と思い、そこに「純然」たるミクロネシヤ・カナカの顔から「立派」さを見いだしたのである。そして、「私」のこの言葉を通して、南島原住民の美を積極的に評価する「私」の姿勢がみえる。しかしその一方で、「私はマリヤンの盛装姿を見たことがある。純白の洋装にハイヒールをはき短い洋傘を手にしたいでたちで

<sup>4</sup> 一つは冗談半分の結婚話に対してマリヤンが本気で自分の結婚のことを考えていたことに気付いたときに、それを「可笑しくなつて、大きな声で笑い出し」て、「やっぱり、内地の男は、どうなんだい？」と聞いたところである。もう一つは、H 氏と「私」が一時内地に帰ることになったときに、二人の帰りを惜しんでいるマリヤンの「おじさんは、そりゃ半分以上島民なんだから、また戻つて来るでしょうけれど、トンちゃんはねえ。」という言葉に「あてにならないと言うのかね」と答えたところである。

ある。彼女の顔色は例によって生き生きと（あるいはテラテラと）茶褐色に光り輝き、短い袖からは鬼をもひしぎそうな太い腕が逞しく出ており、円柱のごとき脚の下で靴の細い高い踵が折れそうに見えた」といった、「私」のマリアンの〈身体〉に向ける冷笑の視線も随所にみられる。当然ながらこの「私」の言葉を「ユーモラスな表現<sup>5</sup>」としてみることも可能であろうが、しかし、マリアンの「純然」たるミクロネシア・カナカの顔が「立派」だと言った「私」の言葉と引き合わせてみれば、「私」のマリアンの〈身体〉に対する評価の揺れや言葉の食い違いが目立ち、「私」の島民マリアンに向けるまなざしや語りの信頼性に揺さぶりをもたらすものである。

そして、このように「私」の言葉を追いかけることで、「私」の言葉にマリアン像を求めること自体の無意味さが露呈し、逆に、マリアンを〈マリヤ〉として語ることのできない「私」像の生成が促されるのである。

### 三、「傷ましき」に隠匿される「私」の〈優越性〉

マリアンの養父は「パラオでは相当に名の聞こえたインテリ混血児で」あるウィリアム・ギボンだと H 氏が「私」に説明した。これに対して発した「ギボンといわれても、私にはあの浩瀚なローマ衰亡史の著者しか思い当たらないのだが」という「私」の言葉から、「相当に名の聞こえた」人をも知らない「私」のパラオの現状をいまだに十分把握していない様子が理解できるほか、すぐに「浩瀚なローマ衰亡史の著者」に連想した「私」の知識人としての一面も同時にのぞかせるのである。また、

ある時内地人の集まりの場所でたまたま私が山本有三氏の名を口にした所、すぐに、それはどういう人です？と一斉に尋ねられた。私は別に万人が文学書を読まねばならぬと思っている訳ではないが、とにかくこの町はこれほどに書物とは縁の遠い所である。 (P257)

の傍線を付した部分のように、「私」は「別に万人が文学書を読まねばならぬと思っている訳ではない」と断りながらも、「この町はこれほどに書物とは縁の遠い所」との一言の裏に、周囲の人々の知識の乏しさへの不満が見え隠れしている。そして、この言葉により映し出されるのは、「私」の考える「私」と周囲との学識のけた違いのみならず、「これほどに」によって露出された「私」の学識に対する〈優越性〉だといえよう。ここから、「私の偏屈な気質のせい、パラオの役所の同僚とはまるで打ち解けた交際ができず、私の友人とっていい

<sup>5</sup> 肖航「中島敦「マリアン」論—植民地に生きるインテリ女性像—」『表現文化研究』第2号、P7、2006.3

のは H 氏の外に一人もいなかった」という言葉からみられる「私」の孤高状態が必然性の高いものであることもうなずける。

一方、コロール第一の名家に属し、内地の女学校で教育も受け、英語も日本語も自由に駆使することのできるマリヤンは、厨川白村の「英詩選釈」と岩波文庫の「ロティの結婚」によって映し出された、「コロール第一の読書家」としての一面に「私」と同質なものがみられる。つまり、「私」もマリヤンも「頭脳の程度の相違」で周囲から浮いた状態に陥っているのである。そして、それは「私」の場合においては孤高の姿勢として表出されるのに対して、マリヤンの場合においては「結婚できない」状態で示されている。

しかし、「私」はマリヤンと同質性を有しているにもかかわらず、それを認めることなく、むしろ差異化しようとするのである。それは「私」のマリヤンの〈身体〉に対する冗舌な語り方からもうかがえる。例えば、「体格や腕力から云っても男の方が敵わなかったのかも知れぬ」、「厚い唇を綻ばせた」、「堂々たる体軀の島民女」、「厚い唇を丸くとんがらせて吹く」とあるように、「私」はマリヤンの〈身体〉の持つ特徴を繰り返して語ることによって、マリヤンの〈身体〉にイメージされる〈土民性〉〈未開性〉を強調するのである。他方、マリヤンにみられる〈開化〉についても、「私」はそれらのものに〈哀れ〉を感じ取るのである。

「私」があるとき、H 氏と二人でマリヤンの部屋に寄ったとき、マリヤンのテーブルに厨川白村の「英詩選釈」と岩波文庫の「ロティの結婚」を見付け、次のよう感想を述べている。

そういう雰囲気の中で厨川白村やピエル・ロティを見つけたので、実際へんな気がした。少々いたましい気持がしたと言ってもいい位である。もっとも、その書物に対していたましく感じたのか、マリヤンに対していたましく感じたのか、そこまではハッキリ判らないのだが。 (P256)

さらに、次に示す盛装姿のマリヤンを見た個所においても「私」は純白の洋装にハイヒールをはき短い洋傘を手にしたマリヤンに「傷ましき<sup>6</sup>」を覚えたのである。

いつか彼女の部屋でロティを発見した時と同じような傷ましさを再び

---

<sup>6</sup> 「マリヤン」の作中で、視点人物「私」がマリヤンに向ける気持ちを「いたましい」という言葉で表現している。しかし、その表記が、一つは「いたましい」、もう一つは「傷まし」と二つある。これら二つの表記を作者が意識的に区別して使っているようにみえないので、こちらでは同一義で考えていることをお断りする。

感じたことも事実である。但し、この場合もまた、そのいたましが、純白のドレスに対してやら、それを着けた当人に対し〈て〉やら、ハッキリしなかったのだが。 (P259)

従来「開化し過ぎている」マリヤンの姿は、「外来の「開化」に侵入された「島民」内部の犠牲者<sup>7</sup>」としてとらえられ、日本語を操る彼女を「日本語」に全身被爆した人間の一人<sup>8</sup>と見なされている。確かに、厨川白村の「英詩選釈」や岩波文庫の「ロティの結婚」、ハイヒール、洋装、洋傘によってイメージされる文明に「被爆」されたマリヤンの姿は「私」の語った通り「いたましい」存在であるし、〈開化〉に侵された「犠牲者」であろう。しかし、ここで一つ注意を払いたいのは、傍線を付した部分である。場違いに置かれた「純白のドレス」やロティの本や厨川白村の「英詩選釈」に向ける「私」の「傷ましき」は、むしろ未開に「被爆」された文明への痛みと云ってよかろう。それは、「私」のマリヤンに向ける「傷ましき」とは決して同質のものではないのである。そこで、「私」の「純白のドレス」や「ロティの結婚」への〈傷ましき〉の裏に「私」の「未開」に対する〈蔑視〉が隠されているといえよう。

#### 四、〈結婚〉という補助線

「マリヤン」をより詳細に検証すると、〈結婚〉をめぐる話は意外と多く見当たる<sup>9</sup>。特に、南洋島民マリヤンのテーブルに、一見、無造作に置かれていた厨川白村の「英詩選釈」やピエール・ロティの「ロティの結婚」が、実に重要な意味を持っているといえる。厨川白村といえば大正期にベストセラーになった『近代の恋愛観』（改造社）の著者で、いわゆる恋愛至上主義を鼓吹し、当時の知識層の青年に大きな影響を与えた人物である。そして、テーブルに置かれた厨川白村の「英詩選釈」に収められている詩の多くも〈恋愛〉を詠むものである。そして、このような恋愛や結婚を扱う本を2冊も身近に置くマリヤンの関心事の域は、恋愛や結婚から脱してないということがうかがえよう。また、その裏付けとなるのは、H氏がマリヤンに内地人との結婚話を勧めたとき、マリヤンが長く思考にふけたことが挙げられる。

「マリヤン！マリヤン！（中略）マリヤンが今度お嬢さんを貰うんだったら、内地の人でなきゃ駄目だなあ。え？マリヤン！」というH氏の言葉に、マリヤ

<sup>7</sup> 楠井清文「中島敦「マリヤン」論」『日本文藝学』第39号、P90、2003.2。

<sup>8</sup> 松下博文「中島敦「マリヤン」考」『叙説』通巻14号、P58、1997.1。

<sup>9</sup> マリヤンと2度も離縁した夫とのことや、「ロティの結婚」にあるロティとララの結婚は無論であるが、「開化し過ぎているために大抵の島民では相手にならず、結局もうマリヤンは結婚できないのじゃないかな」というH氏の悩みが語られることによって、マリヤンの結婚話について幾度も言及されている。そして、H氏の結婚話も語られたのである。

ンは返事をする事なくプールを眺めていた。そして、「私」がH氏の続きを忘れてしまったところに、マリヤンが「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ」と、その思いを口にするのである。マリヤンのこの一言からは、彼女は内地人と結婚する可能性を「本気」で考えていることをうかがい知るのみならず、ある原因を持ってそれを断念したことも垣間見られる。

前述したように、内地の女学校で教育を受けたマリヤンは内地人に劣らない学識を有し、〈開化〉した島民である。そして、常に「内地人の商人の細君連の縁台に割込んで」、「雑談の牛耳を執っている」マリヤンに、〈被植民者〉としての一面は実に気付きにくい。しかし、島民女に時々課せられるこの町の「勤勞奉仕」としてバナナ畠の下草を刈り取っているマリヤンの姿に〈被植民者〉の一面が発見され、マリヤンが吹いているフォスターの甘い曲は、大抵「北米の黒人共の哀しい歌だった」ことを「私」が思い出したときに、〈開化〉に隠匿されたマリヤンの〈被植民者〉の哀れが露呈されるのである。

すると、H氏が考えた内地人との結婚策は、むしろ、両方とも解決できる方法であるともいえる。つまり、マリヤンが「開化し過ぎ」たために、もたらされた「結婚できない」状況、言葉を換えて言えば、島民の世界にそぐわない彼女の孤独は内地人との結婚によって解消できる一方、内地人との結婚によって、被植民者層から植民地統治層への参与も可能になる。

しかし、それにもかかわらず、マリヤンは「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ」といい、それを断念したのである。その理由は、「私」とH氏が偶然にもそろって一時内地へ帰ることになったときに、「内地の人と幾ら友達になっても、一ぺん内地へ帰ったら二度と戻って来た人は無いんだものね」としみじみと語るマリヤンの言葉にある。

「ロティの結婚」では、イギリスの海軍士官ロティが、滞在先のタヒチでマオリ族の少女ララフと出会い恋に落ちるが、結局、ロティは彼女を置いて帰国し、捨てられたララフは苦悩の末、死んでいくのである。一方、内地人との結婚を自ら断念したマリヤンには、植民地男性に翻弄されるララフと決別し、南洋島民女の宿命から自立しようとする一面がみられる。そして、「一時」帰国のはずである「私」とH氏は、肋膜炎や結婚などのそれぞれの事情から、ついにマリヤンの予言通りに再び南島に戻らないこととなった。「マリヤンが聞いたら、何というだろうか」という「私」の問いの裏に、ララフを捨てて帰国したロティの〈後ろめたさ〉と同様のものが隠されているであろう。